

爆笑する農家

だじゃれで組織や家族に潤い

だじゃれには、リラックスした雰囲気を作り、人と人とのコミュニケーションを円滑にする効果がある。また、遊び心や創造性を引き出すなど、乾いた組織や家族に潤いをもたらす効用もある。組織や家族の関係を高めるには、だじゃれをどう使えば良いのか。『爆笑する組織』(自由国民社)の著者、日本だじゃれ活用協会代表理事・鈴木ひでちかさんに、コツを伝授してもらおう！

コミュニケーションも円滑に



鈴木ひでちかさん

日本人は、昔から掛け言葉や語呂合わせに慣れ親しんできた。例えば、お節料理の黒豆には「まめまめしく働けるように、だいたい(橙)には「代」家が栄えるように」といった願いが込められている。

農業製品や宣伝にも、こうした言葉遊び——いわゆる「だじゃれ」が使われている。例えば、ホクト(長野県)は「まのこのこのこげんまの」と一度聞いたら忘れないコマシヤルを配信。我那覇畜産(沖縄県)では琉美豚とスウフィンンド肉を作出している。

また、筑水キャニコム(福岡県)では、乗用車刈機に「草刈機まさお」という名前をつけている。顧客からは「うちのまさおが調子が悪いので来てほしいんだけど」という電話があったり、営業マンが客先を訪問した時には「まさおは元気ですか?」といったあいさつが自然に取り交わされるなど、心温まるコミュニケーションの機会が増えたという。「このように、だじゃれは、誰でも、どこでも、簡単に楽しめるコミュニケーションの方法」と鈴木さんは称賛する。

- ① 同音異義語を使う
- ② 言葉を つける・切り離す
- ③ 音を使う
- ④ 英語化する

では、どのようにだじゃれを考えれば良いのだろうか。ポイントは、音が似た別の言葉を見つけ出すこと。コツとしては、

- ① 同音異義語を使う
- ② 言葉を つける・切り離す
- ③ 音を使う(擬音・促音・濁音・半濁音)
- ④ 英語化する

「例えば、「シヨウガがないならしょうがない」というように、同音異義語から考えてみるのも一案だ。また、「ブドウ、一粒ぶどう」というように、元になる言葉(ここではブドウ)の前に言葉をつけたり、「ハクサイ食べたら、歯ぐき」というように、歯ぐきと「が」を切り離し、別の文脈を作るという手もある。

さらに「レタスを食べ過ぎて疲れたっす」というように、促音(っ)などの「音を使っただじゃれも、ぜひ試してみてもいい。

「だじゃれは、おやじギャクとは違う。おやじギャクは自己満足が起点だが、だじゃれは相手を思う愛がある」と鈴木さん。

家族が落ち込んでいる時や場を和ませたい時には、「種まきの季節になったね」「不作続きで気がふさぐ(ふさぐ)」。そんな会話から始めてみてはどうだろうか。

